

## 原発被害の当事国なのに脱原発がなぜ進まないのか

第2回  
4・14反貧困フェスタ

4月14日、仙台弁護士会館で、第2回反貧困フェスタが開催され、250人の参加があった。今回は、「震災があぶりだした貧困2012」～被災地から～がテーマ。基調報告では、義援金を受け取ると生保がはずされる。震災後の雇用保険が切れると、仕事が見つからずたちまち生活に困窮するなど、震災が貧困を作りだしていることなどが報告された。

現場からの報告として、①路上生活支援の現場 ②生活保護支援の現場 ③宮城県の原発被害者の立場 ④外国人支援の現場 ⑤女性の立場 ⑥父子家庭支援 ⑦仮設住宅支援の現場 7人から報告があった。②では塩釜在住で6人家族の女性が、2年間水道が止められ、電気・ガスも1ヶ月以上止められていた。福祉事務所に生保の申請に行くが、他からの援助を優先させるように言われていた。国保も滞納していたのに、国の指針である訪問も行われていなかった。生健会で生保に繋げる事ができたが、2年間水道が止められどのように生活してきたのか、行政の役割を放棄しているとしか思えない事例。③では、角田市在住の男性が、福島に近く放射線量も高い、これまで薪でストーブやお風呂を使っていたが、3.11の原発事故以降は、灰にする



雨宮 処凛さん



湯浅 誠さん

湯浅さんは、震災後見えてきた課題で「山が大きすぎてすぐには乗り越えられないと思えても、少しずつ進むしかない」「大事なものは積み重ねていくこと、それは何かの時に力になる」。生保申請でも劣等感を感じる必要がないことを広めなければいけない。多くが対象になることでスティグマ（汚名・恥辱）はうまれない。震災で困っている人など含め、非正規労働者、自殺、孤立死、DVなどで、“制度にのらない人の制度”を充実させる必要性などを話した。

と30倍以上に濃縮され(2万ベクレル)、1年前の薪からも2千ベクレルの数値がでて、畑や田んぼは汚染され、地元の野菜が食べられない。子どもを西日本に連れだしたりしているが、元の暮らしを返してほしい、原発は直ちにやめてほしいと訴えた。⑥では、支援者が、今回の震災で母子・父子家庭になったのは1206件、そのうち432件(36%)が父子家庭、父子家庭には遺族年金が支給されない。432件のうち65.7%のお宅が全壊、5.1%が半壊という状況で、仕事のある人でも子育てのため残業や出張が出来ず、収入減など、多くの問題があることを報告。⑦では、支援者が、「被災者だけではなく、被災地に住む人」の支援が必要と訴えた。1階を津波で使えなくなり2階に住んで

### 制度にのらない人の制度を充実させる必要がある

その後、湯浅誠さん(反貧困ネットワーク事務局長)と雨宮処凛さん(作家)の対談が行われた。お二人の対談は、現場からの報告を聞いて、また、これまで取り組んできたことを紹介しながらフリーな形で行われた。雨宮さんは昨年6月に行われた脱原発3万人のDVDを紹介しながら、デモ主催のイタリアの人が「原発被害の当事国なのに脱原発がなぜ進まないのか」と怒っていた。また、「生存を無条件で肯定する」の考えから、人間の価値観の多様性にふれながら、運動の本質を見て自分を見失わないこと等述べた。



2011年4月29日午前8時55分

震災の記録

南三陸町志津川

## 城南信用金庫が脱原発宣言

数日前のTVに城南信用金庫(本店東京)の吉原理事長が出演していて、同信金が脱原発の方針であることを述べていた。お客さんや子どもたちの未来のためにと。震災後は宮古や福島の行員を引き受け、被災地で炊き出しを行った。現在は2台の車で毎週6名が仮設図書館(移動)でタイヤキ、タコヤキを配布している。90年代のアメリカ金融自由化で、お金が暴走、市場が全てという風潮で、お金に振り回されるのではなく、社会貢献の重要性を認識。脱原発の全国市長会議が同信金で開催されるという。